

## 刈羽郡西山町灰爪出土の人骨群所見

新潟大学医学部解剖学第一教室

刈羽郡西山町灰爪出土の人骨群所見

新潟大学医学部解剖学第一教室

本人骨群は新潟県刈羽郡西山町灰爪地内で、農作業中に偶然、発見されたと称される合計4個体分からなる。そのうち1個体は、昭和52年7月19日に、3個体は昭和53年6月8日にそれぞれ当教室の故小片 保教後死に搬入されている。小片 保教後死去のため、本人骨群についての報告が遅滞していくが、今回当教室の加藤克知、松村博雄を中心に本人骨群の所見をまとめて、その概略を報告する。なお、遺骨領域については元当教室研究生三村一郎氏に教示いただいた。

本人骨群の由縁等については、江戸時代末から明治時代初期にかかる戊辰の役に因連するらしいとも称されているが、詳しい考古学的考证が加えられていないので、詳細は不明

である。ただ、人骨群の出土状況、保存の程度あるいは骨質からみると、上述の時代に属する可能性が充分考えられる。また、4個体中3個体にみられる刀痕らしき損傷はその歴史的背景を物語るようでもあり興味深い。

一方、人骨形質、地質的、時代的特徴を検討する参考的方法に集合比較法といふのがある。本論では、頭蓋、計測可能で主要な項目について、モリソンの偏差折線図を作成し、本人骨群形質、地質的、時代的側面を草的に論じた。比較集団は森田(1950)の関東現代人を基準として、小片ら(1960)の越後現代人、森田ら(1960)、河越ら(1962)の湯島無縫坂出土の江戸時代人および鈴木ら(1962)の芝白金田沼塚墓地出土の江戸末・明治初年の人骨群(男性のみ)である。

記載を避け三部合土、昭和52年度に収入された個体を第1号人骨とし、昭和53年度収入のものを適宜、第2号、第3号、第4号人骨とする。第4号人骨は第2号人骨中に混入し

ていた右上腕骨幹の一部である。

なお、本論での刃物による損傷の分類および用語等は鈴木(1956)によった。

## 新見

### 1. 第1号人骨 (写真1)

#### 1) 出土状況

仰臥、上肢・下肢屈曲位で出土している。頭部にも強く屈曲がみられる。手は左右のものが握りしめ、胸郭の左部で右上方に位置しているようであり、これらのことから入葬的に埋葬されたと考えられる。保存状態はかなり良好である。

#### 2) 人骨のおもな特徴

頭蓋： 脳頭蓋は男性としては、長く、幅、高さともに小さいが、前肉の付着部は概して

粗糙であり、眉弓、眉上弓、乳様突起、前頭部輪郭線の特徴から男性と考えられる。なお、骨盤構成骨である竪骨、天生骨切痕を中心とする形態もこれを裏づける男性型である。死後時の年令は頭蓋、主要縫合、歯。咬耗なし、磨耗や竪骨頭骨結合面の形態から次年期の中ごろ（およそ30才前後）と推定できる。

頭蓋長幅示数は頭蓋長径よりの頭蓋中型に属する。上顎部、高径は小さく、幅径が大きい、コルマンおよびワイルヒョウの上顎面示数はともに小さく、上顎面部けがなり強い「寸づまり」の貌を呈する。これはひとつの中・近世的特徴といえる。しかし、反、歯の程度は全側面角、値から小さいことがわかる。下顎骨、顎下切痕は著明で、下顎体は「ゆりかす」状を呈している。

上顎左第2、第3大臼歯、下顎右第3大臼歯と左、第1・第2・第3大臼歯には軽度（1度）の齲歯がみられる。

頭蓋のうち年齢について、ミリソン（1973）

(四)

差折線図にて、既述の他の集団と比較してみると、全体的に基準、関東現代人からの脇りが大きいようである。また、概して頭蓋は越後現代人に、下顎骨を含む顎面頭蓋は湯島無縫坂出土や老白金の旧海軍墓地出土、近世人骨群、傾向に近、項目もみられるようであるが、もしも全体的には個人的特徴が強くあらわれている頭蓋と考えるべきであろう。

体肢骨その他：主な体肢長骨を中心とする骨格は全体的に大きく、頑丈であり、筋附着部の状態は筋肉質の体格を想像させる。椎体、特に一部の腰椎本体辺には骨棘形成がみられ、また尺骨切痕関節面には二分傾向が認められる。大腿骨、胫骨および足、骨の一部には薄窓面がみられ、生前蹲踞位を習慣的とっていたことがうかがわれる。

上腕骨、桡骨、大脛骨および胫骨の最大長からピアソンの式に従て身長を推定してみると、164.6cmとなる。

## 3). 刀痕様損傷について(写真2, 3)

頭蓋には鋭利な刃物によると思われる損傷が二ヶ所に認められる。そのひとつは、右側で、前頭骨頸骨突起、頸骨前部から上顎骨外側半部に及ぶ約6cm×5cm。切断面をもつ斬創である。この部はいわば眼窓口外側部と下部に相当し、上顎洞内腔が大きく露呈されている。切断面の状態から斬撃。方向は上方から下方に及ぶものと推される。

もうひとつ損傷は、同じく右側で、上顎骨槽線より上方約3cmのところに、この線に平行に切断されているもので、左の歯と切歯の位置する部から右側の歯槽全体に、さらには下顎歯。前半部にまで及ぶ創長約8cmの斬創である。切断面は鋭く、平滑であり、この状態から斬撃。方向は前方から後方に及ぶものと推される。

## 4). 小括

身長約165cm程度。比較的

筋骨 = たくましい男性を思わせる。年令は壮年期の中ごろで、おおよそ30才前後と推定される。顔面は強い「すばヨリ」であり、中近世的な特徴がうかがえる。頭蓋、顔面部には鋭利な刃物によると思われる損傷が二ヶ所に認められる。

## II. 第2号人骨

## 1) 出土状況

発掘担当者によると、上肢、下肢屈曲位で出土したと称される。保存の状態は比較的良好といえるが、欠損、破損する部分も多い。

## 2) 人骨のおもな特徴

頭蓋： 頭蓋最大長は女性としては大きいようであるが、前頭額部線、眉間、眉上弓、乳様突起、外後頭隆起など、特徴は女性型である。これに加えて、一部残存している寢骨、大坐骨切痕の形態からも女性骨、考へては

は間違ではない。一方、年今は主に頭蓋の主要縫合の閉鎖の程度と齒の咬耗ないし磨耗から推定してみると、恐らく壯年期後半ごろ（おおきね35～39才頃）とするのが妥当などといえる。

上顎高は女性としては小さい方ではないが、中顎高が大きいので、ウイルヒヨウの上顎面示数は小さく、上顎面過低型に近、上顎面低型を示す。すなむち、これも第1号人骨と同様に「寸づまり」の傾向にある。また、下顎性も一見強いやうに思われ、顎面は概して半近世的特徴を有している。モリソンの偏差折線図（図2）によて他、集団と比較してみると、本頭蓋の多くの項目では基準線の現代関東人と離りが大きいようである。概して、これも個人的特徴が強く表われている頭蓋であると思われるが、下顎骨が現代超後人と傾向がやや類似し、この人骨、地域性と若えうと少しく一望が深い。

この人骨には擦傷が多い。すなむち、残存

歯2本のうち、1度（C1）のもの3本、2度（C2）のもの2本、4度（C4）のもの4本、計9本にみられる。いずれも未治療であり、生前は歯痛等に苦しんでいたことが想像できる。

体肢骨その他：主な体肢長骨は全体的に細いが、長さは特に大腿骨で中等度からやや長、部類に属する。また、筋附着部も比較的平滑であり、女性的である。大腿骨の骨幹は、上部、中央部とくに扁平に傾き、その前湾は弱い。前述のように骨盤と構成する亜骨は女性的である。脛骨および足根骨の一部には習性的遠端位姿勢によつて墨床肉節面が認められる。

上腕骨、桡骨、大腿骨および胫骨の最大長からアソンの式によつて推定身長を算出してもみると、おおきね149.1cmとなる。

### 3) 刀痕様損傷について（写真4）

右側頭部で、外耳孔上方にみられる幾分山形のある  $2.7\text{cm} \times 3.2\text{cm}$  程度の不規形の切

断面として残っている。この切断面の様子から、ここを中心としたさらに広範囲に及ぶ斬創と考えられるが、周辺部は欠損しており詳細は不明である。乳突峰突が広く露呈するかなり深く損傷である。また、これと併別に独立した創長約9cmの切創が、右側の外耳孔後縁にみとめられる。

#### 4. 小括

身長はあおむ約149cm程度の女性で、年令は壮年期後半（35才～39才頃）と推定される。顔面は「オーバーリー」の傾向にあり、かつ突顎性も強いようであり、ここに中近世的特徴がうかがえる。かなり進行した齧齒が多く、生前は齒の疾患に悩んでいたであろう。右側顔部で、外耳孔。上方に斬創が、外耳孔後縁には切創がそれぞれ認められる。いずれも鋭利な刃物によると思われる。

#### II. 第3号人骨

##### 1) 出土状況

本人骨は先の第2号人骨と同時に出土したもので、詳細な状況は不明であるが、これも仰臥、上肢・下肢屈曲位であったと称される。保存の状態は第2号人骨とほぼ同等であるが、骨質はやや脆いように思う。出土時に思われる骨の破損、欠損がみられる。

##### 2) 人骨の主な特徴

頭蓋：頭蓋最大長は女性としてはかなり大きいが、最大幅は小さく、従って頭蓋長幅示数は強い長頭型を示している。また、バジオニ・ブレグマ高も小さく、頭蓋長高示数は低頭に偏った中頭を呈する。すなわち、頭蓋は前後に長く、幅がせすく、幾分低いことがわかる。

頭蓋：前頭輪郭線、眉間、眉上弓、乳様突起、外後頭隆起などは本頭蓋が女性のものであることを示す。さらに、骨盤を構成する宣

骨の形態もこれを裏づけている。一方、年令については、頭蓋の主要縫合の閉鎖があまりみられず、歯の咬耗ないし磨耗も軽度である。また、下顎第3大臼歯（親知らず）は埋伏状態にあり、これらの所見と主な体股長骨の骨端線の状態などから考えて、おおよね社長期の初め頃（20～25才頃）と推定できる。

顔面頭蓋は前述の大人骨同様に、コルマンとワイルヒヨウの上顎示数から「寸づまり」の中、近世的特徴を有しているといえよう。また、空顎性もやや強いように思う。

モリソンの偏差折線図（図3）をみると、本頭蓋は、多くの項目で基準線である現代東人よりも大きく傾っていふことがわかる。概して、股頭蓋に向する折線、傾向は現代越後人に、下顎を含む顔面頭蓋は湯島無縫吸出土の江戸時代人に類似しているように思え、興味深い。

この人骨の歯には、形質的に興味ある所見がある。すなはち、上顎第2大臼歯にみられ

るエナメル瘤と下顎右大歯の過剰根（双根性）である。

本例にも、残存歯のうち5本に齲歯がみられ、その程度は1度（C1）、2度（C2）、3度（C3）のもの各1本、4度（C4）が2本である。第二号人骨同様、歯病等にからり極まっていたと考えられる。

### 3) 体股骨その他

主な長骨は上、下肢とも女性としては長い方であるが、骨幹は中等度から幾分細い方に属している。ただ、筋附着面は割合粗糙である。大腿骨の骨幹は上部および中央部とともに前後に扁平である。胫骨、足根骨の一部には、習慣的蹲踞位姿勢による異常丘（蹲踞面）がある。

上腕骨、桡骨および胫骨の最大長からピアソンの式に準じて推定身長を算出すると151.1cmとなる。この数値は第二号人骨と同等で、興味深い。

## 4) 小 拙

身長あわてぬ151cmで、江戸末から明治の初めのものとすれば、如く大柄の女性であつたろう。顎面顎蓋は又「寸づまり」の傾向を有し、突顎性の比較的強いことと併せて、中、近世的特徴を有するといえよう。また、頭型は刀、ウリ、長頭に傾いているのも興味深い。年令はあよそ壯年期の初め頃で、20~25才程度と推定される。

なお、この人骨には肉眼的検索からは、刀物等による損傷は認めえない。

## IV. 第4号人骨 (写真 5)

骨表面腐食のかなり進んだ右上腕骨外科頭以下の骨幹約16.5cmである。前述の如く第2号人骨に混って出土している。大小の結節核や三角筋粗面などの筋付着部、発達は良好であるところから、断定はできぬが男性と思われる。

外科頭より約1.5cm程遠位で、三角筋粗面の下境にあたるとこ3に深さ約2mm、創長約14mm程の近位から入った、鋭利な刀物によると思われる切創が認められる。また、この創より近位1.5mmのところに1.5mm程度の浅い横創様のものがみられるが、詳細は不明である。

## まとめ

昭和52年7月と昭和53年6月に新潟大学医学部解剖学第一教室に搬入された、西山町灰化出土の人骨群(4個体)について調査し、次の結果を得た。

1. 4個体の人骨のうち、昭和52年7月に搬入された1個体(第1号人骨)は壯年期中ごろ(30才前後)の男性骨と推され、骨骼の特徴から比較的大柄で筋骨たくましい体格を思わせる。指定身長はあわてぬ165cmである。

2. また、昭和53年6月に搬入された3個体、うち2個体は女性骨(第2号、3号人骨)で、推定年令はおおむね社年期の後半(35才~39才頃)と社年期前半(20才~25才頃)に属し、推定身長は前者がおおむね149cm、後者が151cmである。他の1個体は性別、年令不詳の上腕骨の一部である(第4号人骨)。

3. 本人骨群の形質的特徴については、頬面頭蓋が広、低顎で、すなわち丁寸がさりの傾向にある。かつ、突頸性、比較的強いものもあり、中近世的特徴がうかがえる。

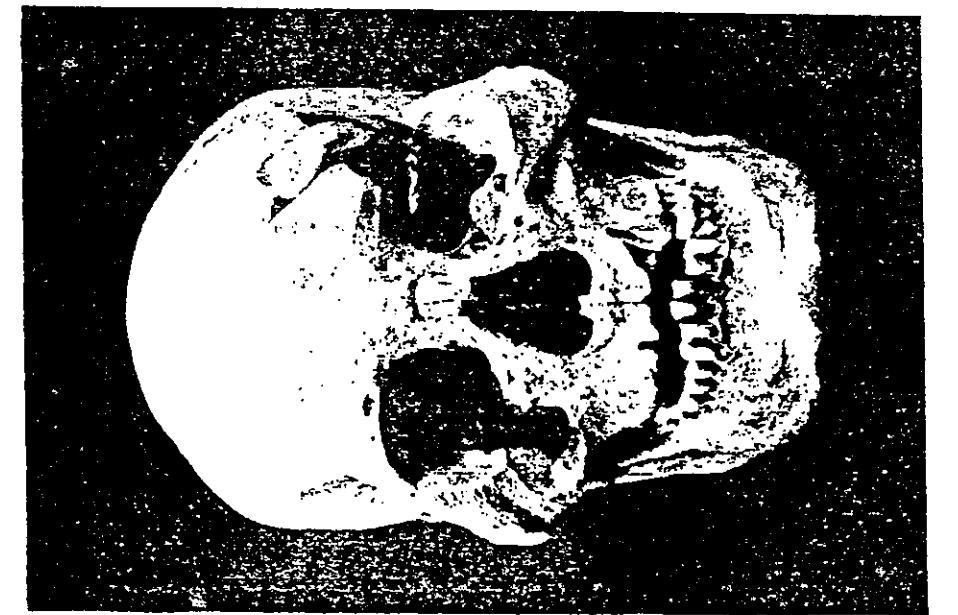
4. モリソンの偏差折線図による検討から、本人骨群頭蓋形質のあり方へて現代越後人、あるいは湯島黒縁坂出土の江戸時代人骨の傾向に類似しているようにも思えるが、かららずしも明らかではない。むしろ、個人的な特徴のあらわれた頭蓋といえよう。

5. 第1、2および4号人骨には鋭利な刃物によると思われる擦傷が認められる。

6. 現所、保存状態等からみて、本人骨群

の土中にある長期的にはおおむね100年内外とするのが妥当ともいえるが、保存の状態、土壌の性質等種々の外的条件により、ても左右されるので断定はできない。

7. 人骨の出土状況から考えて、人為的に埋葬された可能性が大きい。



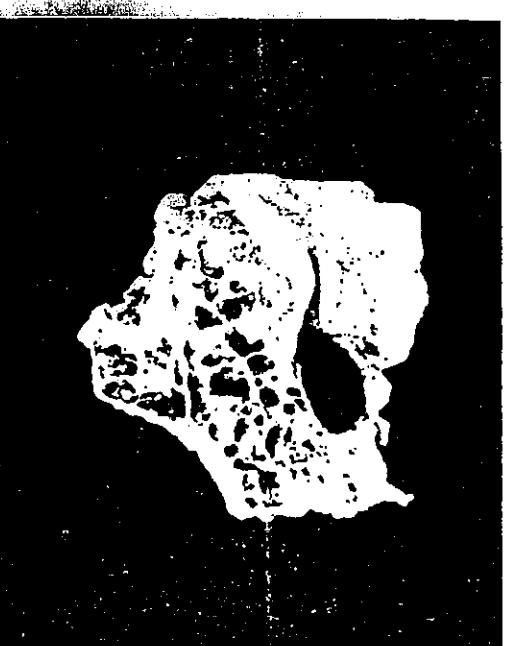
写真・1 第1号人骨、男性(壮年) 頭面鏡。  
右眼窩外側部と右上顎部の歯槽部に  
みられる鋭利な損傷に注目。



写真・2 第1号人骨右側面鏡。  
損傷部を中心とした大  
きな動脈窓が頭面  
の上部に露呈してい  
る。



写真・3 第1号人骨の右上顎部  
の損傷の損傷の拡大(口  
蓋側から撮影)  
——歯槽——一歯頸な  
いし歯根  
が水平に切断され  
る。



写真・4 第2号人骨、女性(壮年) にみられる  
右側頭部の損傷。外耳孔の上方に及ぶ  
乳突蜂巢の露呈がみられる。また、耳  
直孔後方に切創も認められる。



写真・5 第4号人骨、性別・年齢不詳。  
右上腕骨とその骨幹にみられる切創。